

主題：キリストのパーソンは信者たちにとって何であるか

メッセージ 13

安息日

聖書：創 1:26, 31 — 2:2. 出 31:12-17. マタイ 11:28-30

- I. コロサイ第2章16節から17節によれば、キリストは安息日の実際です。彼はわたしたちの完了、安息、平穩、完全な満足です——イザヤ30:15前半。
- II. 神の住まいの建造に関する長い記載の後、出エジプト第31章12節から17節に、安息日を守る戒めの繰り返しがあります：
 - A. 安息日に関する挿入が幕屋の建造する働きの命令に続くという事実が示すのは、主が建造する者、働く者たちに、主のために働くとき、どのように主と共に安息するかを学ぶように告げていたということです。
 - B. もしわたしたちが、どのように主のために働くかを知るだけで、どのように彼と共に安息するかを知らないなら、神聖な原則に反して行動しています：
 1. 神が第七日に安息したのは、彼の働きを完成して満足したからです。神の栄光が現されたのは、人が彼のかたちを持ち、彼の権威が行使されて、彼の敵サタンを征服しようとしていたからです。人が神を表現し、神の敵を対処する限り、神は満足し、安息することができます——創 1:26, 31 — 2:2。
 2. 後ほど、第七日は安息日として記念されました（出 20:8-11）。神の第七日は人の第一日でした。
 3. 神はあらゆるものを用意して人に享受させました。人は創造された後、神の働きに加わったのではなく、神の安息の中へと入りました。
 4. 人が創造されたのはまず働くためではなく、神をもって満足し、神と共に安息するためでした（参照、マタイ 11:28-30）。安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のためにあるものではありません（マルコ 2:27）。
 - C. 出エジプト第 31 章 17 節は言います、「六日の間にエホバが天と地を造り、七日目に安息し憩われた」：
 1. 安息日は神の安息であっただけでなく、彼の憩いでした。
 2. 神は彼の創造の働きが完成した後、安息しました。彼は御手のわざを見つめ、天、地、すべての生き物、特に人を見て、「非常に良い！」と言いました（創 1:31）。
 3. 神は人のゆえに憩いました。神がご自身のかたちに霊のある人を創造したのは、人が彼と交わりを持つことができるためでした。ですから、人は神の憩いでした—— 26 節. 2:7. 参照、ヨハネ 4:31-34。
 4. 神は人類を創造する前、「独身」でした（参照、創 2:18, 22）。神は人が彼を受け入れ、彼を愛し、彼で満たされ、彼を表現して彼の妻となることを願いました（II コリント 11:2. エペソ 5:25）。神は未来の永遠において、妻、すなわち新エルサレムを持ち、それは小羊の妻と呼ばれます（啓 21:9-10）。
 5. 人は神を憩わせる飲み物のようであって、神の渇きをいやし、彼を満足させます。

神は彼の働きを終えて、安息し始めたとき、人を彼の同伴者として持ちました。

6. 神にとって、第七日は安息と憩いの日でした。しかしながら、神の同伴者である人にとって、安息と憩いの日は第一日でした。人の第一日は享受の日でした。
- D. わたしたちが享受を得る前に、神がわたしたちに働くことを求めないのは、神聖な原則です。わたしたちは彼と共に、また彼に対して満ち満ちた享受を持った後、彼と共に働くことができます：
1. もしわたしたちが、どのように神と共に享受を持つか、どのように神ご自身を享受するか、どのように神で満たされるかを知らないなら、どのように彼と共に働き、彼の神聖な働きの中で彼と一になるかを知りません。人は、神が彼の働きの中で成就したものを享受します。
 2. ペンテコステの日に、弟子たちがその霊で満たされたことは、彼らが主に対する享受で満たされたことを意味します。彼らがその霊で満たされたので、他の人は、彼らがぶどう酒に酔っていると思いました——使徒 2:4 前半, 12-13。
 3. 実は、彼らは天のぶどう酒に対する享受で満たされていたのです。彼らはこの享受で満たされた後はじめて、神との一の中で神と共に働き始めました。ペンテコステは第八週の第一日でした。ですから、わたしたちはペンテコステの日に関して第一日の原則を見ます。
 4. それは神にとって、働いて安息する事柄です。人にとっては、安息して働く事柄です。
- E. わたしたちは召会を建造するという神の神聖な働き（幕屋を建造する働きで予表される）を行なうとき、しるしを帯びて、わたしたちが神の民であり、神を必要としていることを示さなければなりません。その時わたしたちは、神のために働くだけでなく、神と一になって神と共に働くことができます。神はわたしたちの働く力、また労苦する能力です：
1. わたしたちは神の民であり、しるしを帯びているべきです。すなわち、神がわたしたちの享受、力、能力、すべてとなって、わたしたちが神のために働き、彼を尊び、彼の栄光を現すことができるようになる必要があります。
 2. 安息日が意味するのは、わたしたちが神のために働く前に、神を享受し、彼で満たされる必要があるということです。ペテロは内を満たす神、すなわち内を満たす霊によって福音を宣べ伝えました。ですから、ペテロは神の同労者であるというしるしを帯びており、彼の福音の宣べ伝えは神にとって誉れと栄光でした——14 節。
 3. 神の民として、わたしたちが帯びなければならないしるしとは、わたしたちが神と共に安息し、神を享受し、まず神で満たされ、そしてわたしたちを満たす方と共に働くということです。さらに、わたしたちは神と共に働くだけでなく、神と一である者として働きます。
 4. わたしたちは神の民に語る時、わたしたちの主がわたしたちの力、能力、すべてであって、言葉を供給するためであるというしるしを帯びることを、常に求めなければなりません——II コリント 13:3. 使徒 6:4。
- F. 安息日を守ることはまた永遠の合意、あるいは永遠の契約であり、わたしたちがま

ず神を享受し神で満たされることによって神と一になり、そして神のために、神と共に、神との一の中で働くことを、神に向かって保証します——出 31:16 :

1. わたしたちが自分自身によって主のために働き、しかも彼を飲み、食べることによって、彼を受け入れ彼を享受することがないのは、厳粛な事柄です——参照、I コリント 12:13. ヨハネ 6:57。
2. ペテロはペンテコステの日に語っていたとき、内側でイエスにあずかり、彼を飲み、食べていました。

G. 安息日はまた聖別の事柄でもあります (出 31:13)。わたしたちは主を享受し、そして彼と共に、彼のために、彼と一になることによって働くとき、自然に聖別され、俗なすべての事物から神へと分離され、神で浸透されて、肉的で天然であるすべての事物を置き換えます。

H. 召会生活の中で、わたしたちは多くの事を行ない、しかもまず主を享受することがなく、主と一になって主に仕えることがないかもしれません。そのような奉仕の結果は霊的な死と、からだの交わりを失うことです (14-15 節)。

I. 神の住まいに関するあらゆる事は、わたしたちを一つの事柄に導きます。それは主の安息日、そしてその安息と憩いです。召会生活の中で、わたしたちは幕屋におり、幕屋はわたしたちを安息に、神の定められた御旨と彼がなしたことの享受に導きます！

J. 幕屋とそのすべての器具を建造する働きは、神に対する享受をもって開始し、その期間に神を享受することによる憩いをもって継続すべきです。これが示すのは、わたしたちが神のために働くのは自分自身の力によってではなく、彼を享受することによって、また彼と一になることによってであるということです。これが安息日の原則を守り、わたしたちの霊の中の内なる安息としてのキリストを持つことです。

III. 「すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに来なさい。そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える。わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。そうすれば、あなたがたは魂に安息を見いだす。なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」——マタイ 11:28-30 :

- A. ここの労苦は、律法の戒めや宗教の規則を守る努力の労苦を指すだけでなく、あらゆる働きにおいて成功しようとする奮闘の労苦も指しています。このように労苦する者はだれでも、常に大きな重荷を負っています。
- B. 主は御父をほめたたえ、御父の道を承認し、神聖なエコノミーを宣言した後 (25-27 節)、このような人が彼に来て安息を得るようにと召しました。
- C. 安息は、律法や宗教の下の、あるいはあらゆる働きや責任の下の労苦と負担から解放されることを指すだけでなく、完全な平安と満ち満ちた満足をも指しています。
- D. 主のくびきを負うとは、御父のみこころを受け入れることです。それは、律法や宗教のあらゆる義務によって規制され支配されたり、何かの働きの奴隷にされたりすることではなく、御父のみこころによって拘束されることです。
- E. 主はそのような生活をして、他のものではなく、ただ御父のみこころだけを顧みました (ヨハネ 4:34. 5:30. 6:38)。主はご自身を御父のみこころに完全に服従させま

した（マタイ 26:39, 42）。ですから、主はわたしたちに、主から学ぶように求めています。

- F. 柔和、あるいは溫柔であるとは、反対に抵抗しないことを意味し、へりくだるとは、自分を重く見ないことを意味します。すべての反対の中で、主は柔和であり、すべての拒絶の中で、彼は心がへりくだっていました。
- G. 彼はご自身を御父のみこころに完全に服従させ、ご自身のために何を行なうことも願わず、ご自身のために何かを得ることを期待しませんでした。ですから、環境がどうであっても、彼は心の中に安息を持っていました。彼は御父のみこころで完全に満足していました。
- H. わたしたちが主のくびきを負い、彼から学ぶことによって見いだす安息は、わたしたちの魂のためです。それは内側の安息です。それは単にどんな外側の性質のものでもありません。
- I. 主のくびきは御父のみこころであり、彼の荷は御父のみこころを実行する働きです。そのようなくびきは負いやすく、苦しくはありません。またそのような荷は軽く、重くはありません。
- J. 「負いやすい」というギリシャ語の言葉は、「用いられるのにふさわしい」を意味します。ですから、良い、親切で、柔和で、温和で、容易で、喜ばしいものであって、困難で、過酷で、険しく、苦痛であるのと相対します。
- K. 神のエコノミーのくびきはこのようなです。神のエコノミーにおけるあらゆる事は重荷ではなく、享受です。

主を享受する

イザヤ 57:20、フットノート 1. エレミヤ 2:13

イザヤ 30:15 前半

詩 43:4 前半. 16:11. 48:2、フットノート 1. 46:4. 51:12. 36:8-9

ネヘミヤ 8:10

イザヤ 12:2-6. 51:11. 56:7

ピリピ 1:4, 25. 2:17-18, 28-29. 3:1. 4:1, 4, 6-7

エレミヤ 15:16. ヨハネ 8:31. 15:7. エゼキエル 3:1-3

I ヨハネ 1:4

ヨハネ 15:11. 3:29-30. 17:13. 14:21, 23

詩第 133 篇

申 12:7, 18. 16:11, 14

雅 1:1-4. 4:10. 2:4-5, 8-9. 3:9-10

I テサロニケ 5:16-18

ヨハネ 4:34. 5:17

ヘブル 1:9

啓 22:1, 14

エゼキエル 47:1

I ペテロ 1:8

ヨハネ 21:15-17

マタイ 25:21, 23

ルカ 15:7, 10

II コリント 1:24

ピリピ 2:2, 1:25

ローマ 14:17

ガラテヤ 5:22

箴 15:13 前半, 17:22

ヨハネ 14:6 前半, 20:22, 4:10, 7:38-39, 6:35, 57, 8:12, 15:5, 7

© 2012 Living Stream Ministry